

人は水は音がたがやす  
 牛は音がたがやす  
 稲は音がたがやす  
 音もたがやす  
 育つ

芸能界周遊日記② 鎌田慧 2

「スター」日記⑤ 坂本龍一 4

家族・友だち日々の糧⑤ 志沢小夜子 6

料理がすべて⑤ 田川律 8

本や人物往来記② 笠原功三 10

たのしみがない⑤ 高橋悠治 12

ひがんだぼんさん迷走日記 高橋卓志 14

子供たち⑤ 柳生まち子 16

行ったり来たり⑤ 西山正啓 18

「豚草ももよ」の巻 竹内晶子 20

テレビの自分と他人 斎藤晴彦 22

ぼくが作った本⑤ 平野甲賀 24

わるいくせ⑤ 八巻美恵 26

下手の横吹き笛日記⑤ 西沢幸彦 28

友だちと吞めば本になる⑤ 津野海太郎 30

ネコロガリカット 柳生弦一郎

# 芸能界周遊日記

6月18日 北九州小倉地裁。指紋押捺拒否裁判。被告はチオエ・チャンホア(崔昌華)さん。検事側証人は、北九州市北区の市民課長。証人席で、外人登録法違反で告発した市民課長が被告のように背中を丸めて小声で答え、その後から被告のチオエさんが、「告発したことを人間としてよかつたと思っているんですか」と大声で追及する。告発、起訴は法務省の方針。指紋押捺の強制は国家の治安維持のためだが、日本が裁かれている図である。

6月19日 小倉市北区の中央公民館で反戦の市民運動をしている知人たちの集会。この町には知り合いが多いので断わり切れない。終って、焼とりと焼ちゅう。酒を我慢していた深田俊祐のクルマで運ばれて泊めてもらう。彼は新日鉄の運送を一手に引受けている

巨大下請企業の運転手。七人だけの第一組員である。弟は犯罪小説で著名な超流行作家。兄貴も小説を書くのだが、こっちの方はまったく売れない。

6月21日 葛飾区。「がんばれゲンさん」のコマースヤルで売りだした間下このみちゃん宅を訪問。お茶を運んだり、コーヒートを淹れたり、コップを洗ったり甲斐がいしい。芸能生活の合間に大人を相手にままごと遊びをしているようである。

6月22日 六本木。CBSソニーのスタジオでチェッカーズの録音をみる。

6月23日 深夜十一時すぎ。チェッカーズ出演のフジTVスタジオ。はじめて流行の「オールナイター」なる女子学生と片岡鶴太郎をみる。三時すぎの玄関脇には、彼女たちが出てくるのを待つ青年たちがたむろしている。平和な風景。

6月24日(日) 九段・教育会館。愛知と千葉を結ぶ教育集会。司会を押しつ

けられたが、発言希望者の意見をきいているうちに時間切れ。「管理」反対者に司会はムリ。

6月26日 レコード会社相手の宣伝担当プロ経営の青年と会う。雑誌用の企画をつくる商売である。

6月27日 午後 総評文学賞の選考会議。野間宏の衰えることのない好奇心にはいつも驚嘆させられる。

夕方 赤坂のキャピタル東急で、イデス・ハンソンの結婚記者会見。モンペ姿。老後は亭主の田舎の九州に帰って畑を耕やすとか、ホントオ?

夜 六本木のテレ朝ちかくの中華料理屋でナシモトに突撃インタビュー。彼はこの店の割り引き券をもっていて、助かった。

6月29日 練馬区・大泉学園は東映撮影所。大竹しのぶ妊娠記者会見。そのあと、プロダクションの女性社長と昼めし。レポーターに追っかけまわされるのを防ぐための、母胎保護の見地

からのセレモニーとか。

6月30日 十時、総評会館で民放労連の集会。一時半、教育会館でCBSソニーのアイドル歌手のオーディション東京予選。十四、五歳でも、いまはみんな一人前のオンナなんだな。夜、チェッカーズ取材。

7月1日 十時 民放労連の集会。サービスしすぎて、一時からの知人の結婚式に三〇分遅れて出席。ひとがしやべつているときに前列にひとつだけ空いている席にすべりこむのは、勇気がいる。

7月3日 世田谷区の自宅で夏目雅子の婚約記者会見。終って六本木でチェッカーズ取材。夜、ホテル・ニュー・オータニで夏樹陽子離婚記者会見。

芸能記者らしい充実した一日。

7月4日 キャピトル東急で、超売れっ子作詞家・売野雅勇の取材。全共闘↓ライベイトフィルム↓コピーライターを経た現代的青年。

7月5日 成田へ。デモではない。

松田聖子の帰国記者会見。広いターミナルビルをウロウロしているうちに、話題の主人公は到着していた。

7月6日 渋谷区神宮前で、思想ルックの創始者・秋山道男と会う。チェッカーズのトータルプランナーである。彼の兄貴がよく知っているセクトの大幹部、とはあとで知った。大スクープかな。

7月8日(日) CBSソニーのオーディション全国大会の前段予選。前に坐っているのは、審査員だけなのでみんな緊張している。この段階ではぼ買手がついている。

7月10日 渋谷のマツイスタジオで売れっ子の作曲家の芹沢廣明取材。朝食で一曲。クルマの中で一曲できるとか。夜12チャンネル。またチェッカーズ。

7月11日 ニュー・オータニで売野雅勇二度目の取材。夜、梨元の自宅で取材。

7月13日 夜、武道館。薬師丸ひろ子と原田知世の角川映画封切り前夜祭。

男のコが九〇パーセント。

7月14日 午後 千代田公会堂で、日弁連のエン罪集会、控室で谷口繁義さん兄弟と面会。夕方 読売ランド・イースト。「夏は絶対チェッカーズ!」を見物。九九・九パーセントが、女子中・高生。みんな素直で可愛い子ばかり。「起ちあがらないで下さい」とポーカーの要望を受けて坐ったまま。両手を頭の上にかざしてクネクネ動かしただけ。一万人集まったもなんの心配もない。管理教育の成果だろうか。

池袋をまわって電車の帰り道、前に坐った十七、八の女の子が会場で売っていたパンフを眺めていた。着飾ってウチワをもっている。納涼大会の参加者のようである。

七月十五日(日) 徹夜。三十時間もかかって、「週刊朝日」連載「芸能人時代」の第一回分(四〇〇字で十五枚)を書きあげる。前途遼遠。乞御協力。

鎌田慧

# 「スター」日記

6月18日、日本青年館でローリー・アンダーソンを観てピテカントロプスにかけつける。パイクの出版記念パフォームンス。出演者、パイク、高橋悠治、高橋鮎生、細野晴臣、立花ハジメ、三上晴子、と僕。お客の方がすごい面子だった。

6月19日、雑誌の為のローリーとの対談。ステージとは違って違ってもの静かな人。4時、インクステイックで撮影。洋服の中を汗が滝のように流れた。5時、ハナダで悠治さん、浅田君と座談会。7時、冬樹社編集室で浅田君と撮影。その後、神楽坂の「和可菜」で撮影。10時、六本木の「東風」でパイク氏と打合わせ。11時、浅田君、義江さんと代官山「ウーム」で打合わせ。水牛カセット・ブックについて、高橋悠治について、柄谷行人について、ゴ

ダールについて等々。

6月20日、12時羽田に集合。大阪フェスティバル・ホールでAKKOの「O・S・O・S」コンサート。東京をいれて3回コンサート。

6月21日、OFF。

6月22日、打合わせがひとつ。

6月23日、11時、自宅で撮影。風太は学校からの帰りが遅く出演しなかった。

6月24日、OFF。

6月25日、ベルリン音楽祭の打合わせ。NHK408st. 「サン・スト」ゲストAKKO。如月小春と打合わせ。

ラジオ・ドラマをつくる。5時、音響でソロの録音。0時半、義江氏と打合わせ。

6月26日、六本木NEWZで大貫妙子のヴィデオを見る。5時、音響でソロの録音。山下達郎がギターを弾く。

6月27日、2時、菊池武夫オフィスで打合わせ。3時、東映本社試写室で「愛情物語」を観る。こーいのはじめて

スタジオ109。プロモーション・ヴィデオ用素材撮り、こうじ町スタジオ。やっぱり滝の汗。踊ったり笑ったりして筋肉痛になった。シリンド浅田君と会う。浅田君は12日からイタリヤに行くそうだ。疲れていてロレッツが回らない。

7月6日、音響で雑誌取材。ピーターパン・シンドローム・テストを受けて良い点を得た。音響1st. でソロの録音。ソロ・アルバムは今月中に終わると宣言した。一年半余、さすがの僕も、もうつき合いきれない。早く終わらそう。

7月7日、都美術館でパイクの作品を使つてのヴィデオ撮り。製作進行でもある。パイク氏の瞬発力もすごい。唯我独尊。

7月8日、OFF。

7月9日、都美術館でヴィデオ撮り。8時、音響でソロの録音。白井良明が来てギターを弾く。

7月10日、国際文化会館でパイク氏と打合わせ。パイク氏との会話をテープに録った。編集してソロの素材にする。六本木、和泉屋で朝日出版社中野氏と打合わせ。10月刊行予定の「週刊本」の件。音響でソロの録音。

7月11日、2時、NHK1F食堂で如月さんとラジオ・ドラマの打合わせ。DJ番組だかラジオ・ドラマか判らない現実と虚構が交錯したものをつくらう。

7月12日、パイク氏と最後の打合わせ。彼は今日N・Yに帰る。「もう日本には来たくない」と言っていた。前衛村の利権がからむ。菊池武夫オフィス、打合わせ。

7月13日、ハジメとAKKOでヴィデオの打合わせ。NHK602st.

「サン・スト」ゲスト、ムーン・ライダース。矢野ミュージック・オフィスで打合わせ。

7月14日、OFF。

観た。5時、飯倉ラフォーレで新作楽器紹介イベントを見る。7時、音響でソロの録音。デイヴィッド・ヴァン・ティーゲムがパーカッションをやる。6月28日、12時、NHK502st. 「サン・スト」ゲスト、大貫妙子・鈴木さえ子。3時、原田知世と対談。5時、代官山「ウーム」で撮影。麻布スタジオで撮影。如月小春が男装、僕は女装。

6月29日、音響でソロの録音。6月30日、音響でソロの録音。

7月1日、OFF。

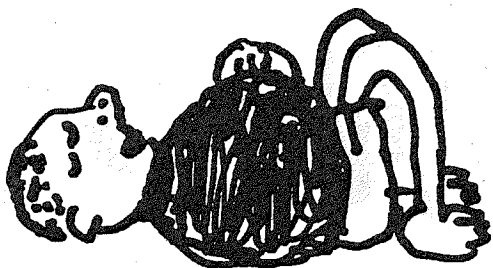
7月2日、パイク氏と打合わせ。音響でソロの録音。

7月3日、NHK602st. 「サン・スト」ゲスト、トーマス・ドルビー。飯を食う約束。音響、ソロの録音。くじらが来てVIOLINを弾く。

7月4日、音響でAKKOのプロモーション・ヴィデオ用ミックス。7月5日、スタジオヴォイス用撮影、

7月15日、OFF。永らく続いたソロ・アルバムも来月にはもう終了しているはずだ。早く次の事がやりたい。

坂本龍一



## 家族・友人日々の糧

六月三〇日 厚生年金会館で、フジTVと和解成立の日ファイルおめでとうコンサート。昼の部へまや子と。あれこれと盛り沢山で娘はすっかりあきている。終って父子と待ち合わせギョウザの大陸へ。ひさしぶりの外の食事。

七月一日 美恵、悠治さんちで飲む。津野、鎌田、その日私と一緒にだった名古屋の先生藤田さん。芸能レポーターと化した鎌田さんは着ているものまでいつもと違う、ひとしきりチエツカーズの話。津野さんから飲みすぎだ、やせろと言われ、本当の兄のような気がした。

七月六日 職場へ行くと、いきなり今日の臨時教育審議会設置法案の衆院内閣委・文教委の連合審査の傍聴へ行くよう指示される。仕方なく国会へ出かけ、空港のようなチエツカをすませ、荷物はずべてロッカーへ。待っている

間傍聴に際しの諸注意というのがあって、その中に異様な服装の物はダメとある。異様ってナニとゴチャゴチャ言ってる。私のことかなと大きな声で言うともんな喜んで笑った。何しろ若くてやせてた頃職場にジーパン、Tシャツ、ビーチサンダルで出勤したら、ここは海じゃないよと言われるし、議員会館をTシャツ、ジーパンで歩いていたら、きたないものでも見るように、何ですあなたはと怒られた。私にしてみれば、国会周辺の方が異様なだけだ。

中に入ると始まっていて、眠くなる。国会は老人の村だから、若い江田五月や船田中などがウロウロしていると、これだけで異様。質問者は、やたらごくろう、ごくろうとほめ、質問しながら笑みをたやさず。やや自嘲気味。文部大臣は運動部出身の大学教授風で、文部の役人がその後何十人と風呂敷をかかえて待機。これも何やら異様、

それにもまして、お盆にコップをいっぱいいせて、冷たい水をセンセイに運んでくる女の人が、中学生位に見えるのも異様だった。共産党のヤジのセンセイが時々眠気をさましてくれるが、眠いのと異様さで夢心地。外に出ると拝みたいほど都会の風が有がたかった。便利屋さんのハシリってのは私たちをおいて外にないと確信した。

七月八日 浩太郎の六歳の誕生日は六日だったが、友だちを集め、パーティをやってくれと言われ、六人ほどの悪ガキを招待し、ケーキとお茶をふるまった。雨の中、キンケシ（キン肉マンの人形たち）をメンコのようにしてぶつけ、ひっくり返った人形の勝ちという遊びをしたり、サッカーをやってドロドロ。日々の糧と思うにはあまりにひどい。

六月一〇日 再び内閣委傍聴、ずっと立見、自民党のオバさん多数が山のように傍聴席におしよせて、身動きで

きない。又もやほめ合っている。そして共産党のヤジのおじさんも元気。本当にこんなことではないだろうか？

終ってドイツ・青ざめた母をみる。ナチの党旗についた虫が無気味。

六月一日 山川・清水氏にさそわれ、すかぶら座というスペースで、林竹二、授業開国をみる。みそこなった映画の一つだったので、ちよっとガツカリと、そうだったのかで納得。閉じるより開く方が大変とは、自分にひきつけてみると教訓。

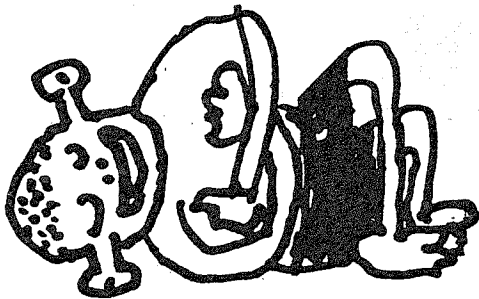
七月一三日 全国教文部長会の二日目。青林舎の山上氏を親しい教文部長に紹介し幹旋業のよう。カゲキにやると目立つからと思うが、身体が身体だけに、困ったもんだ。前日『高原に列車は走った』の試写、映画の出来は今一つだが、斎藤さんが、斎藤さんのまんま出てきて、思わずふき出す。

夜、玉川信明さんの『ダダリスト辻潤』の出版記念会。はなやかで、騒々

しくて目まいがしそう。ひさしぶりに福本英子さんに会う。帰り、本当に具合が悪くなった。

六月一七日 国歌を考える会委員会、事務局長の林光さんと『民族の祭典』の話。この人の『意志の勝利』のヒットラーはプロパガンダ映画のきわみでものすごく魅力的だった。終って悠治さん、山住さんら委員とビールを飲む。いつになったらやせられるのだろうか？ 私の意識の勝利というのはあるのだろうか？ 不安……。

志沢小夜子



# 料理がすべて

〈今月の外食〉「珉珉」(京都・三条)ギョーザ、レバ・ニラ、モヤシ炒め、「でん政」(大阪・森之宮)かつおたたき定食、「アングル・サムズ・サンドイッチ」(世田谷・上野毛)卵とキャベツのサンドイッチ、「レイズ・ブリ」(世田谷・下北沢)カレー、「中華一番」(新橋)味噌ラーメン、「立田野」(青山)納豆定食、「雪園」(新宿)カニの玉子トジ、カモ煮、揚げシユウマイ、平貝と野菜の煮付、「牡舌亭」(神田)タン定食、「松茂」(築地)焼魚定食、「店名忘却」(テキサス州ダラス)カモの胸肉、セロリのクリーム・スープ、「MANNA」(イリノイ州シャンペン)焼肉定食、「店名忘却」(イリノイ州シカゴ)ロースト・ビーフ、「環球」(イリノイ州シカゴ)ホット・サワー・スープ、焼飯

のものを、シユウ油、ゴマ油、ミリンで味付けし、削り節をまぜてかける。ぼくの「中華風」よりはるかにウマイ。②ファタベチ(?) (少し太目のキシメン状 pasta) の生クリーム・チーズあえ。この麺をゆで、少しゆで汁を残したまま、バター、生クリーム、パルメザン・チーズをまぜ合わせ、塩、こしょうをして、すぐに食べる。③ほうれん草のサラダ。ほうれん草を生のまま、ざっくり手で千切る。オリーブ油、砂糖少々、マスタード(粉)、少々塩、こしょうのドレッシングであえる。もしあれば、ヒマワリの実をまぜる。これが利く。④ブル・コギ(焼肉)。タレは、ニンニクのみじん切り、ゴマ油、砂糖、酒、シユウ油、ゴマ、ネギのみじん切り、コチジャン。そこへ肉を漬けてしまうと肉が硬くなるので、焼くまえにタレにまぶすようにする。

〈今月の発見〉日本に帰った日に、友人のイラストレーター沢田俊樹くん

「店名忘却」(イリノイ州シカゴ) 目玉焼、ベイグル、「店名忘却」(下北沢)ざるうどん、「初花」(上野毛) 鰻重。

〈今月の給食〉七月十二日から二十一日迄アメリカ行き。この間、成田・シアトル、シアトル・ダラス、ダラス・シカゴ、シカゴ・ダラス、ダラス・シアトル、シアトル・成田間で「機内食」という名の給食を食べさせられた。肉、サラダ、ケーキ、どれをとっても給食そのもの。ある時、包装紙に包まれたものだけ、その「出身地」を調べてみた。塩とコシヨウ↓タイのバンコク、バター↓オクラホマ州のオクラホマ・シテイ、チーズ↓イリノイ州シカゴ、サトウ↓製造地記名なし、コーヒーマイト↓カリフォルニア州ロサンゼルス、ピーナッツ↓ジョージア州のどっか(忘れた!)、ライ麦クッキー↓ミズーリ州セントルイス。

以上は、タイ航空のシアトル・成田

の家へ行き、ジャコとコブ巻をごち走になった。いずれもかれの出身地青森の特産。ジャコはそのものズバリ。煮干しとチリメンジャコの中間の大きさのものをそのまま食べるだけ。コブ巻きは、普通のダシコブより、ずつと薄い。しかも塩分の多いコブを広げ、そこに炊き立てのご飯を盛り、その中へ納豆を入れて、お握りのように、コブでくるみ、しっかりと握って、コブごと食べる。ノリほど柔らかくないので、食べる時に格闘することになるが、なかなかのものである。

〈今月の教訓〉日本へ帰ってきた次の日に食あたり、になったみたいだった。みたい、というのは、気分が悪くなり、吐きそうになって、じっと我慢していたら、冷汗が出てきて、家中を探して、これまたとても古そうな「ワカ末」なる腸の錠剤を見つけ、のんで横になっていたら、一夜で直ってしまったので、しかも下痢もしなかったの

間て出されたものについての記録だがアメリカ全土にまたがって仕入れが行われているワケだ。

〈今月のおよばれ〉七月十五日から十八日まで、イリノイ州から南へ飛行機で五十分ばかり行ったところのシャンペンという町に住む、藤本和子、デイベイッド・グッドマン夫妻の家に逗留した。和子さんの料理のうまさは定評がある。今回もこの間だけは、アメリカにいる気がしなかった。こと、食べ物に関する限り。ごち走になったものは①中華風冷奴。この町に「AMKO」という名の韓国材料食品店があり、そこには日本のもの、シユウユから、インスタント・ラーメンはおろか半年遅れの「週刊新潮」まである。そこで売られている木綿豆腐は、実においしい。東京でなら自然食品店でさえも売ってない「固さ」とうまさ。さてその奴に、ニンニク、シユウガを刻み、生のピーマンをミジン切りにし、以上

で、ホントに「あたたか」のか、時差ボケと暑気あたりが混合していたのかはつきりきめかねるからだ。原因はしかしどうやら、古い朝鮮漬(大根)にあったようだ。この日、久し振りに昼に家でご飯を炊いて、冷蔵庫を開けると七月二日に大阪で買ったそれがまだ残っていて「漬物やし、平気やろ」と思って、ついついそれだけでご飯を食べたのが悪かったようだ。

〈生き物と食べ物〉水族館へ行っても、水槽の中で泳いでいる魚を見て、まず「おいしそうや」と思う人は大勢いるようだ。七月二十日、シカゴの巨大な「シエド水族館」では、そうは思わなかったが、魚の名前が全部英語で書いてある(あたり前だ)と、見慣れた魚まで違うように見えて、とうとう鯛、鱈、鯖、鮪、などを特定できなかった。

田川律

# 本や人物往来記

6月14日 ついつい仕入に夢中になつてしまい帰りが遅くなり、五時半に開店。おもしろそうな新刊多数入荷。

6月15日 仕入に行く前に、セミナーに間に合わせるための、急ぎのお客さんに本を渡す。天気がいいので仕入も楽だ。開けてまもなく久保覚さんが見えて、しばらくして津野さんが水牛をもって来店。

6月16日 山内さんから電話で、在庫の有無を問い合わせたいとのこと。

「ここんとこ、買はずぎちやって、たまってのヨ」という悲鳴を聞きつつ、心の中では「ポーナスが出たらヨロシクネ」とつぶやいて電話を切る。五時スギ森武さんから、授業のおくれて五時半スギ頃になりますと電話ある。

6月18日 仕入を終えて、急ぎよ臨時休業にして東邦生命ホールへ、クセナ

キスのユピックスシステムコンサート”を聞きに行く。

6月19日 定休日 家族で鳩ノ巣へ。平日でも少ないし、天気もよかったので気分は上上。そばの花が咲いていたので、昼食は手打ちそばに決めた。夕食は途中の河辺でおりてキバのレス

トランへいこうと思ひ、電話したら定休日だったので、国分寺へ出て、星野豆腐店へ（星野さんは熱狂的吉本隆明ファンであり、今だに天然にがりで頑固につくりつづけている人。）豆腐は売切れだったので、厚揚げ、がんもなど買う。それから「だめてる」へ。

6月20日 夜、増井さんが新刊をもって来店。

6月21日 中野の版元へ仕入に行き、その足で郵便局へ書籍小包を取りに、そしてスピード違反の罰金を払う。アホクサ。

6月23日 夜、久し振りに三好さんがみえて、それから閉店後に今村さんが

みえて、今度メキシコ留学していた人と会うので、その手の本を捜しに来店。いさなで、リウスの本をすすめ、

山崎満喜子さんの「メヒコの自由学校」をすすめ、そして「孤独の迷宮」と「ラテンアメリカ詩集」も買っていかれた。6月24日 今日売れた。

6月25日 森清さんが、上甲さんを連れてみえる。増井さんがみえて「今日の経験」（藤田省三）をくださった。感謝。6月26日 今日仕入に行かないと動きがとりにくくなってしまふので、やむなくどしやぶりの中を仕入に行く。定休日だつていうのに。

6月27日 開店前に宮川さんと、西瓜糖へ配達に。辻さん久々に来店。田原桂一撮影の「SD」、『世紀末建築特集』のデザインの事など話す。帰りの電車で「今日の経験」を読む。思考の密度の濃さは圧巻、かみしめるように読む。6月30日 おふくろの誕生日なので家に電話をする。それだけですむのかな

あ。

7月1日 今日は晴津さんのお姉さんが帰国するとかで休むとの連絡をもらう。お姉さんが外国へ行つてる間に、引越をしたので迎えにいかないと自分の家がわからないそうなのだ。

7月6日 ああ言えばこう言う。こう言えばああ言うの神山さん来店。「明日は開店三周年ですね」と嬉しいことも言ってくれる。

7月7日 今日で3年。おかげさまで、あと3年は頑張れる？ 森武さんが花をもってきてくれる。

7月9日 「マス・イメージ論」発売。売れ足が早い。今日は仕入の前にユーロスペースへ、見逃していた「秋のドイツ」を見に行く。やはり面白かった。パンフで池田浩士さんが、ほんの少し日本でのドキュメンタリーフィルムについて鋭く言及している。「略」それらの記録された画像のいくつかが、いまだれほど風化させられ、衛生無害な一

片の知的風俗と化していようと」と。

7月14日 晴津さんが店の3周年記念にと、自分で製本した豪華なノートをくださった。感謝。

7月16日 支払いの悪い画廊へ督促状を出し、紀伊國屋書店と鹿島出版会の選択常備をやり終えて、ホッとひと息。7月17日 定休日なので長男と紙飛行機を買い、飛ばしっこをする。二人だけで遊ぶのも久し振りなので悠（長男）も嬉しそうだった。帰ってから風呂に入り、またもぐりっこなぞしてしまつた。

7月19日 今流行りの環境音楽を店で流していたら、樋口さんが「最近リフ（レイン）ばかり多くって、人をバカにしたような音楽が多いね」と憤ってらした。うなずける。骨抜き音楽っていう意味かなあ？

7月21日 降ったりやんだりのはつきりしない天気。店もなんとなくはつき

りしない。お客やーい。

笠原功三

# たのしみが無い

6月18日 U P I Cコンサート。そのあと原宿のピテカントロプスでパイクや坂本龍一とパフォーマンス一時間。どちらも60年代の音からでられない。

6月19日 朝クセナキスと会って、U P I Cを日本で開発することについて相談する。夜ローリー・アングスンを見るが、ほとんどねてしまった。とてもよくできたショーだとおもったが、キカイはカネをかけた分だけ音質がよくなるのはあたりまえだ。人間がキカイになる方が効率がよい。

6月22日 渋谷で三宅榛名のソロ。へさまよう風の痛みは、自分でひくよりおもしろかった。音の断面の乱反射が見えるような感じ。

7月1日 うちで6月生れの人たちの誕生会。鎌田慧(12日)、志沢小夜子(21日)、祝う側を代表して津野海太郎

・デイヴィスのセッション。ハルモニウムのつかいかたと、最後にやったモックの「ラウンド・ミッドナイト」がよかった。

葉弥はきのうとうってかわってわるいので、どやしつけると二階でふてねしてしまった。

7月14日 都美術館で休業中の水牛楽団の3人がフィリピンの歌3曲をタガログ語でやる。ケーナとキムとドイラ2つの伴奏。そのあと美恵と津野海太郎と齋藤晴彦の4人で浅草のどじょう屋、そば屋とまわる。

今月はこんなところか。

夏がきて、いつものようにアタマがぼんやりして、アセモができる。テールブルの脚をはずして板だけ床におき、ごさの上にさぶとんをしいてくらししていると、たべるときでさえ、すぐ横になつてしまう。床の近くからへやを見わたすと、きいてしまったレコードやカセット、つかわない楽譜、よんでし

平野甲賀(28日)は息子と野球観戦のため欠席。話題は鎌田慧の芸能界取材裏話につきる。

7月2日 金雲夏リサイタルの伴奏をする。開場時間には客どころか、主催者さえ顔がそろわず、どうなるかとおもったが、一時間ほどたつとデモ帰りの青年たちが到着して、安田生命ホールも約半分うまる。なぜかピアノの方にスポットがあたり、歌手は影になつている。韓国歌曲、抵抗歌など18曲。

7月3日 美恵が中井さんと笠井潔をつれてかえってくる。この人は、なめを見て話すしぐさが昔の自分と似ている、とおもいながら、でも、あんなに論理を立ててしやべれなかったな。

「マルクス主義をやめてよかった」とは、きたい人だけくればいいとおもえるようになったことね。」

7月4日 夜3年ぶり位でPARCにいくと、すっかり様子がかわつていた。みんなほどよく元氣そう。ちようまつた本の山が目につく。何よりうつとうしいのは、ひかないピアノの黒い箱で、これをやめて電子ピアノにしようかと何日かかんがえ、カタログをながめくらししたが、音があまりにやすっぱいので結局やめた。やたらに身辺整理したがるのも、死期の近づいた人みたいだから、手をだしかねている。というより、ものはなかなかすてられないのだ。

コンピュータやシンセやテープにもまた手をだしかけてみたものの、プリミティブな、ほとんど楽器以前の音のむらの魅力からははなれられない。あけずりで、無器用で、まばらで、不ぞろいなもののデリケートな手ざわりと、それらがキカイのまねをするおかしさの方がいい。

夏の間につくると約束したもの、十七弦の曲、ハモニカとヤンチンとピアノの曲、合唱団のための何か(如月小春と)。そんなにはんやりしてもいられ

ど土本さんがきていて、帰りに武藤一羊と渋谷の朝鮮料理屋による。

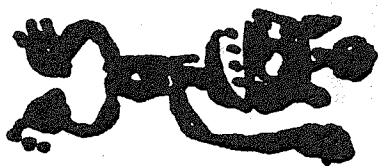
7月5日 申相玉のへ帰らざる密使の試写。チェコで撮影したせい、セピアがかった色で、現代とはおもえないほど格調たかい演技。でてくる日本人はみんな何をかんがえているかわからない無表情でひらべつたい顔をしている。伊藤博文などはそっくり。それらが突然怒りだすところなど無気味だが、朝鮮人から見れば日本人は昔からこうだったにちがいない。

7月7日 深沢少年野球クラブが世田谷区の決勝戦にでるので、一家で応援にいく。雨のなかで泥まみれになつて、10対0で勝つた。葉弥はファーストで球をうけてびっくりかえりながら、トリプル・プレイにもちこむ。ボールがとんでくるのがこわくないのか、あんな棒でよくボールにあたるものだ、とかおもつて見ていた。

7月8日 池袋で三宅榛名とダニー

ないとおもいながら、何もしないでいる。

高橋悠治



## ひがんだぼんさん迷走日記

昔から日記はできるだけためて書くようにしていたから、あまり得意な方ではない。そのかわり、何日分かを思い出すことは天才的だから、水牛通信に書くことなんかは得意中の得意の部類に入る。でも最近、どうも記憶が……。

エート、あれは確か、七月七日だったはずだ。「海盗り」の長野県下連続上映の代表者会議があった。つい最近青林舎の江田氏が試写にまわって来たのだが、それを見るずっと前の二月中旬、愚安定遊佐の「百年語り」を聞いた。それを、私が編集している「ちくま」という弱小雑誌の後記に書いたのを、運悪く見られたため、上映運動の松本代表にされてしまった。そのあと「怒りをうたえ」を見る。何と八時間八時間見て五百円なら安いもんだが、尻が痛くなり早々に逃げ出した。ゼンガクレンの懐しい顔が一杯映っていた

が不思議に随所ではき気がした。

七月十二日。午前中、本月初出荷の無農薬野菜移動販売店の開店を手伝う。「八百屋」という名のヤオヤだが、品数は両手で数えられる位。

午後の列車で東京へ行く。この日は毎年上京することになっている。なぜなら東京はお盆なのである。いわゆる、ひとつの、出稼ぎであるわけだが、本職が坊さんである以上、ひがんとおぼんのスポンサーまわりは、生活上必要不可欠の業務である。

拙僧が（すぐその気になるのが悪いクセ）伺う田舎出の東京人の場合、故郷を捨てた後いろんな苦勞をしながら東京にしがみついている……というパターンが圧倒的に多い。それだけに故郷という言葉には、懐しさにいがい思いが同居している。そんな檀家の皆さんに、田舎の香りが一杯のお経をお聞かせし、田舎を顔にしたらこうなるという我がツラをお見せしてまわるわけ

である。

半年ぶりの東京だから、めったに來れない東京だから、あれも見よう、これも食べようと、特急「あずさ」の中で考えはしたが、結局のところ、クルクル寿しを食べて、新宿のSTミュージックを見て、てなぐあいでも基本的な「オノポリサン」をやってしまった。

七月十三日～十四日。思い出すのもイヤな位、朝早くから夜遅くまで檀家まわり。信州では考えられない程汗が出る。都会の毒素を思う存分吸い込みグツタリして常宿としている新宿の某一流ホテルへ帰着する。フロントはこしやくにも拙僧の姓名、所属会社等をすべて覚えてしまい、「信州のジングウジ様、すね。」と冷く言う。「信州の……」ときたもんだ！コノヤロー。あんまりシヤクにさわるので、「松本の神宮寺です」と言っちゃったが言ったあとこちちの方が落ち込んでしまい、また今

日も「オノポリサン」であったと後悔した。夜、美恵さんに電話。「用事ができて行けません」は、本当のところ「あんまさんを頼みたいので行きたくありません」に変更。葉弥は野球が忙しくて今年には信州には来ないのだと言う。チョット残念。

かくして東京の盆は終りをつけた。七月十六日。「ボランテシア活動の輪をひろげよう」という何だかわけのわからないがそれらしいピラを松本で最大の規模を誇る店の入り口で配る。たった一人で配らされたので何か悪いことをやってみてみたいだった。その証拠に、口をつけて出る言葉は、「スママセン、よろしかったら見てください」であった。

とにかく全部配り終えて今度は映画を見に行った。「反乱するメキシコ」ジョン・リードの取材記の映画化されたものである。腹がへって最後まで見ようという意志がすぐに崩れ去ったが、

その映画の解説をした山本哲士信州大学助教授の話が、というより話しぶりが面白かった。

七月十七日。ふれあい広場の企画を練る。今年のテーマは「であい・ふれあい・語りあい」。いかにもふれあいが満ち満ちていて若干異常だと思いが宣伝用のコピーを作る。

七月十八日。今日は久しぶりに坊さんをやった。朝から我が寺の広報紙「寺報はなぞの」の編集。午前十一時の水子供養と、午後一時の満中院法要。たのまれば何でもやっちゃう坊さんだから、人は変な坊さん、とか、民間人みたいなボンサンと言う。自分では決してそうは思っていないのだが、人からそうしよっちゃうと言われると、そう思わなくては悪いみたい……思う。午後からは信州大学の坐禅サークル「瑠璃参禅会」の接心（合宿）の指導。三炷（約二時間）坐る。何のかんと言っても静かに降る雨音を聞きながら本堂

での坐禅は格別。

七月十九日。今日は民間人となり、CATVの「テレビ松本」に松本の芸能人として出演。ボランテシア活動とは何ぞやと司会にしつこく聞かれる。あくびを噛み殺して司会の質問に答えるのがボランテシアですと、よっぽど言いたかったが、立場が悪くなりそうなので軟弱にも言わなかった。世の中には面白い質問を平気でする人がいるもんだ。

高橋卓志





薄ら寒い雨が久しぶりに止んで、どっと暑くなった。もうすぐ梅雨も明けるみたい。坂の下から自転車を押して上がって来ると、近くのマンションの前庭で、小学二年生くらいの男の子が二人、オヤ、ケンカらしい。成り行きを見まもっている男の子がもう一人。ケンカの二人は髪の毛からポタポタしずくを落しながら、全身ずぶぬれだ。一人が自分のズボンをつまみながら、「弁償してもらいますからね」といつている。ぬれたぐらいで？それに相手だつてびしょぬれだよ。いわれた方は、「だつておまえが笑うから……」だから初めに水をかけちゃつたのか？「笑つたくらい、いいじゃない……」そうかな？

「だけど両方ともあまり元気がない。水をかけ合つたまでは勢いがよかつたようだけど、すっかりぬれぬれずみになってしまつて、お互にびっくりしてるのかな。見まもる男の子もあんまりたいしたケンカじゃないなって顔だ。えらく涼しい夏むきのケンカじゃないの、もっと元氣よくやりなさいよと思ひながら、自転車を押して通り過ぎた。」

# 行ったり来たり

六月二十二日 田無で色々な活動を共にしている医師の山田真さんが初めて本を著した。題して『はじめてであらう小児科の本』(福音館)。地域のつき合ひの中で十分知っている筈の山田さんの人柄なり、医師としての姿勢、考え方が、こうした本と言う形で表現されてみると改めて驚く。

医者として天上の人じゃあない。身体に現われる変調についての基礎知識を皆で持ち合おうというのがこの人の信念なのです。是非、手にして読んでみて下さい。定価は二千元。

そう——水牛通信のカットでお馴染みの柳生弦一郎さんが、さし絵・装幀をやられています。表紙の子供たちの素朴で生々とした表情集が何とも素晴しいです。

この日僕は、八王子のたまり場喫茶

けピンピンしていたオヤジなのにと考え始めたら、可哀そうに思えて仕方がなかった。親孝行は生きている内にせよ——とはかくて名言なり。

六月二十八日 代々木にある学校解放新聞社にぶらりと立寄る。専従の大崎さん、『性長期——つっぱりオバサンからあなたたちへの性のメッセージ』(あいわ出版)の著者で若者たちの良き相談相手でもある鈴木みち子さんとしばらく話す。ここは御存知、内申書裁判の保坂展人氏を支援する仲間たちが創り出した拠点。僅か二部屋の狭い空間には絶えず若い人たちが出入りしている。学校管理を推進するセー党のすぐ傍に、解放を唱える彼らの拠点があること自体パロディーだが、ここには中高生たちの「居場所」が確実に存在している。お隣りさんにそんな場所あるのかな？

夜、三鷹たべもの村で行われたスライド「人を喰うバナナ」の上映会に参

「ローザ」で開かれた出版のささやかな集いに招かれ、柳生さんに初めてお目にかかったのです。子供の表情集が何となく柳生さんの顔に似ていましたよ。映画もそうだけど本創りを介しての人の出逢いも妙ですね。普通のつき合いで言えば山田さんと柳生さんのとり合わせはとても考えられないのですから……。

六月二十四日 秋の「就学時健診拒否」の運動をどうするかについて山田さんたちと話し合った。田無では今年最低四～五人の拒否者がいる。例年に較べその数は圧倒的に多いとは言え、これまでの運動の成果であるとはとても言えない。今年はまだ志を共にする仲間の子供が就学時にあたるだけの話である。学校に行くのが当たり前という市民意識の中で「就学時健診拒否」だけを声高に唱えていても運動は仲々広がらない。「障害」児が地域の小学校から養護学校へ選別、隔離されて当

加した。終わった後の話し合いの最中、少し酒を飲みすぎ自滅してしまった。これ、僕をよくあるパターン。

七月三日 東京ボランティアセンターから依頼のあったドキュメンタリー映画のシノップスを書き上げる。企画意図は「若者の社会参加」つまり、東京のボランティア活動を通して若者の生き方をとらえようという内容である。いま、ボランティア活動は非常に狭い枠の中で語られている。身障福祉、老人福祉などその最たるものであろう。

しかし、ボランティアとは本来、自ら進んで人なり事柄に関わる”の意である。社会運動に関わる行為はみんなボランティア活動だ。金があり暇のある人の善意とか奉仕では決してない。どこでどう間違ったのか日本でボランティアという言葉の持つ響きは本当に良くない。それを映画にしようというのだから、僕は内心ワクワクしている。題名は「もうひとつのライフスタイル

然あるいは関係ないという意識状況が厳然としてあるからだ。

国鉄代々木駅系の教師が主流をなす田無の小中学校の中で、僕たちと共同歩調をとってくれるセンセーを見つけ出すのは至難の技と言ってもいい。関わりを持つことさえも叶わないのだから、いったいどうなってるの？とさえ言いなくなる。学校・地域・人の関わりって何だろうね……。

六月二十五日 遅れに遅れていた水牛通信の原稿をようやく書き上げる。六月二十六日 そうしたら途端に田川編集長より電話が入る。「西山ちゃん……書いた？」久し振りに田川さんの声を聞けたとは言え、こういう内容ではいけませんぞ！

六月二十七日 大阪の実家から電話が入る。オヤジが黄ダンで入院したそう。詳細を聞き山田さんに相談したところ、ガンの疑いあり。後日、その疑いが本当になってしまった。あれだ

ル(仮題・十六ミリカラー・三十分)です。乞う御期待。撮影は秋です。

七月十二日 杉並区公民館講座で行われる映画「みちことオース」の上映と話し合いに出席した。参加者は三十人。映画を創ってみて一番うれいのは、こうした上映会を通して色々な人と出逢えることだ。映画の足らないところは端的に指摘されるし、逆の場合が少しずつわかり始めた。

七月十四日 三鷹たべもの村の第二期「村の教室」の二回目、ややこしい保坂展人氏を招いて、いま学校はどうなっているか、について話し合う。彼は偏差値教育のルールに沿った生き方でなくもうひとつの生き方を選択出来る土俵を大人が如何につくり出せるかを熱っぽく語りかけていた。何をやるにしても花を咲かせよう——花は見えるから——が彼の持論である。

西山正啓

## 「豚草ももよ」の巻

今考えていること。明日かあさつてに髪の毛を切ろうつと。もちろんバツサリとショートカット。でも、刈り上げ「じゃあいけない、おかまかぶつてマコトちゃんカット」でもいけない。あくまでも清く正しく美しく、カッコよくなきやダメなのよ。そう！その日から私は、男装の麗人……。

五年ぶりぐらいに宝塚歌劇を見てしまった。ちよいと前までは、私も熱烈なヅカファンだった。レコードを買って集めては、覚えて熱唱する。セリフ入りならなお宜し。鏡台を前にして赤いランドセルをしょったガキンチョが、「愛すればこそ、お前に愛を選ばせなんだ……それなのに、それなのに、お前は……」などと、涙ぐんでやるんだから、すごい。昔の黄ばんだレコードジャケットの裏の歌詞のところをよく見ると、えんぴつでふりがなふつてあつ

たりする。「幸せ」の右側に「しやわせ」とあるぐらいだから、知能のほどが知れてしまう。

そう言えば、私は宝塚に入って男役をやるんだと心に決めていたこともあつたつけ。今日も隣に座っていた母が、「宝塚を見るたびに、あんたを入れとくんだったと思うわあ。」と言う。な、なんとという軽薄な発言。それなら入れてくれればよかったのに……。そして芸名は何がよかったのだろ、「豚草ももよ」なんてださいしね。第一スター性に欠けるわ。などと言っている私はもつと軽薄!?

フィナーレの最後で幕が閉まる寸前に、他の出演者は全員手をふっている中で、主役の男装の麗人が、客席に向かつて、ゆっくり投げキッスをした。もう、今夜は眠れない……。

あんなものを見たあとの稽古は意味もなく力が入るもんだ。しかし、立ち姿すら醜い私の投げキッスは、どこへ

ちだったなあ。あれ？この頃また、

おヘソが出てきたみたい。困ったものね……。などと考えていたら、やっぱり今夜も不眠症になってしまった。眠れない時は、「右手がだんだん重くなる」とか、「左足が暖かくなってくる」とか、自己暗示をかけるといい、と何かの雑誌に出てたな。でも、羊の数なんか何万びきでも数えられそうなギンギンの夜だぜ！こんな子供だましにつられておネンネするような俺様じゃない。

読みかけの単行本を読み終えてしま、ついに歌を口づさむ。そのうち疲れて気が失うかもしれないというけなげな判断である。せっかくだから、男役風に泣がって唄う。すると一層気分は高揚してきた。そこで、とうとう越路吹雪さん登場！新品のウォークマッパでテープを聞く。耳元の越路さんは、突然私を粹な小娘に仕立てあげる。口をパクパクさせながら、私の心はずつ

かり揺れている。お気に入りの色もヒラヒラスカートをはけば、私は金魚の腰つき。つけまつげをパチパチさせ、まっ赤な口紅の口元をすばめて、そつとはにかむ金魚の私。セ・シ・ボ

男装の麗人だろうが、粹な小娘だろうが、金とどらうが、何でもいいから、すてきな投げキッスのlove player になりたいです。

などと言ううちに、酔いがすっきりまわってきた。そう言えば、さつき水割をひっかけたのでした。お猿のお顔の私は、お尻でも掻きながら、やつと眠りにつけそうです。

明日は町内会の草むしり。はりきつてむしつちやおう！「あら、お母様の代わりに？おえらいわあー。うちの娘なんてねえ……」ご近所の奥様方からの讃辞を浴びる。麦わら帽子に軍手姿の私は、かまをぶらさげて、その時こそ、トップスターだ☆

も届かない……。仕方がないのでクタクタのヨレヨレになるまで、走りまわった。帰りの電車の窓に映る落ちくぼんだほを見ながら、「今朝の私より2kgは減ってるな……」と空しい満足感に浸りながらニヤニヤするのみ。

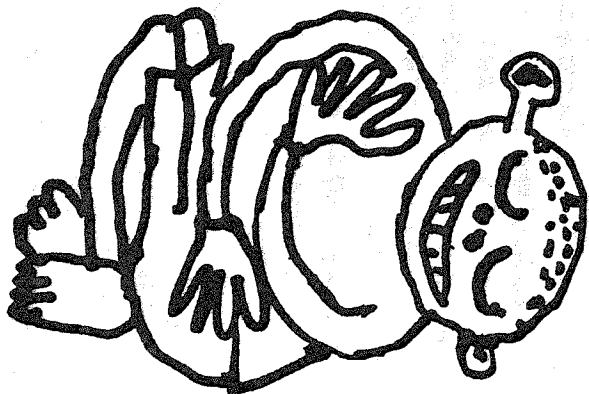
ふと見ると、40、50才ぐらいの酔っ払ったおじさんが、右手でかろうじてつり革にぶらさがりながら、左手は、ワイシャツをめくりあげてむき出しになったお腹を、しかもベルトの上にも三重にも三重にも盛り上がっている大きなおなかを、ポリポリポリポリ掻いているのだ。掻きすぎてもうまっ赤なのに、目をつぶってしかめつっつらでフラフラしながらまだ掻き続けている。思わず口を開けたまま見とれてしまった私。よくわからないけど、「私もがんばろう。」という言葉が胸に浮かんだ。

そうそう、私の幼少時は、半球がくつついたみたい、みごとな出ペソ持

「毎日が草むしり」

そうだ、これをさしあたっての生きる目標としてみるのには賢明な選択といえよう。髪を切るのも、快適な野良作業の為、為……。

竹内晶子



## テレビの自分と他人

また書かなければならないのだ。もう、羽目になってしまったなどと前回の様に甘ったれたことは言つてられない。確約してしまっているのだから。確約はそれを果さなければ一緒に酒飲んでもらえなくなるし、それに「今月は締め切りが二十五日になったぞ」と優しい田川さんに言われた時、俺少しも騒がず「まかせなさい」とテレビドラマ的セリフまわしてもって答えているし。あれはたしか、七月八日の日曜日の夜、PETAのアル・サントスを囲む会の時と場所でのことであつた。ずい分前の出来事だ。そうして時は流れて今日は七月二十四日の水曜日であり、今はもう夜の八時であり、優しい田川さんは、明日という日が一体どういふことを意味しているかということをやんとお知らせしてくれたし。ところが今日俺は朝からテレビの本番があつ

かし俺にはダイレクターの言葉が言葉通りにどうしても聞こえて来ない。こういうふうな聞こえて来る。「はい、今のシーンあんまりです、が、時間がないので、次のシーンに行きます。放送でこのシーンを流すかどうかは判断を許しません。あ、それから、サイトウさん、どうも、ま、面白いから使つてみたらと言われてやってもらつたわけですが、付き合ひは今回限りということ、おつかれさま」俺は蚊の泣くような声で言った。「どうも、おつかれさまでした」誰も答えない。聞こえてないのかしら。と、俺の娘役の小學生が「おつかれさまでしたあ」と言つてくれた。本番もあの位の小さな声でやれば良かったんだ。そうすれば親子の情も出たのかも知れない。ふさぎこんでいるからテレビを観るんじやなく今夜はプロ野球のオールスター戦というのをやっているの観ると江川くんが投げている。字に書く程のことでは

て、父親役をやつて、ひどかつたんでふさぎこんでいた。言つておくが俺は殆んどふさぎこんだりしない。それは庭付き一戸住宅に住む中堅サラリーマンという平和な家庭の父親の役であつた。そして演じられたそれは、どう見ても父親などという代物ではなかつたというわけだ。一つのシーンが終るとテレビユーがあつてモニターテレビに再現しOKか否かを決めるのだが、俺が決めるのではなくダイレクターが決めるのだが、俺はその画面にいる俺を見て、あつと口の中で小さく叫んだ。なんでこんなにおつかない顔してるんだ!! 別に怒っているシチュエーションではないし、どころか、「ただいま」なんて言つて帰つて来て、ちよつと疲れた感じで「なんか変つたことあつたか」なんて女房に言つたり「そうか、うん、それはよかつたな、子供はもう寝たのか」なんて微笑したり、それはそれはもう静かで穏やかな父親役だ。

ないが俺はジャイアンツファンだし深く言えばジャイアンツ症候群保持者の一人である。今、俺は非常にふさぎこんでいる。もう、テレビの仕事はパーだと思つている。画面では江川くんが投げている。彼にはずつと泣かされどおしだ。画面の江川くんにさっきのスタジオのモニターに映つた俺の像がダブる。いやな予感がする。最初の打者を三振させはした。でも、江川くんは謎の人物だ。次はホームラン打たれ、メツタ打ちされ首かしげて引つ込む事多々である。次も三振させた。そして次も。あれ!! 俺のふさぎは徐々に消えて行く。コマーシャルがきれいに見える。そして、この回も三者連続三振だ!! 江川くん、君は偉い。君、やれば出来るんじやないか!! ひよつとすると凄い結果になるかも知れないぞこりや。コマーシャルをじっくり観た。さあ、江川君、男になってみようか。二者連続三振!! 八連続三振になりまし

なのに画面の俺は目は血走り、拳動に落ちつきというものがなく、声やたら大きく、一人で息まいてるではないか。父親役であつて犯人役ではないのに。父親のリアリティが微塵もない。画面の俺があんまりなので思わず顔をそむけつつ恐る恐る周囲を見ると、何と誰もモニターを見てない。スタッフはセツトに腰かけたり、小道具で遊んでいたり、次のシーン待ちといった感じだ。俺がたつた一人で見えていたモニターの下にはメイクさんが二人俺と向い合う形で座つていて何やらくつちやべつてゐる。本番前には必ず俺の顔の汗を拭いてくれてたりしてずい分と仕事熱心なんだなあと感心したの。フン、有名なタレントが出てればモニター一所懸命見るくせに。と、突然、どこからともなくダイレクターの声がスピーカーから聞こえてきた。「はい、今のシーンOK、はい、サイトウさんは終了しました。お疲れ様でした」し

たア。アナウンサーも解説の西本さんも興奮しています。俺も興奮しております。かつて江夏がやつた九連続三振にあと一つです。すでにツーストライクをとつております。三球目投げましたあ!! あーつと、近鉄の大石二郎くん球をバットに当てました。ファーストゴロです。九連続三振の夢は消えました。しかし、今夜の江川くん、これは大変なものです。後半戦のペナントレースが面白くなつてまいりました。俺のふさぎこみは完全にぶつ飛んだ。たかがテレビドラマじやないか。考えてみれば俺の父親役は可成り独創的だ。類型なんかには俺は元来関心がなないんだ。優しい田川さん、ごめんなさい。この際飲みに行つちやう。

斎藤晴彦

# ぼくが作った本

どうやら家の庭は温度が低いらしい。夾竹桃の紅い花がようやく二つ三つ咲いた。車の通る表通りのよその家なんかは今が満開なんだ、どうやら一、二週間の差があるようだ。友人の柳生さんがくれた「フウセンカヅラ」も柳生さん家のは、もう三センチ位のフウセンをつけているのに、家のはよく伸びたわりにはぼつぼつと小さい白い花が咲く程度、でも花といっしょに一ミリ位の緑色の玉状のものがくっついていて、これがふくらむんでしょかね。

●英国俳優物語、エドモンド・キーン伝。大場建治、晶文社。J・P・サルトルの「狂気と天才」に出てくる役者キーン、あつちのほうはやたらと格好よかつたような記憶があるけど、ほんとのとこキーンの放蕩ぶりはどんなであつたらうか。カパーにはキーンのリ

チャード三世の名場面を、たぶんブリキかなんかに型押しして極彩色で色をつけた安ものの絵はがきみたいなのがあつたのでこれを使い、格調の高さの中にも安ピカものを持ち込むという冒険とはおおげさだ。

●燃えよ エコトピアン、「本来イズム」宣言なのだ。山本コウタロー、いもむしころう絵、晶文社。エコトピアンとは、本の折返しによるとエコロジイ・ユートピアのこと、それが本来イズムなのであって、そこでは、いもむしころう君が絵をかき、私がデザインをやる、なんとなく笑っちゃうね。

●第三世界を知る、①アジアの世界。②中東の世界。江口朴郎、岡倉古志郎、鈴木正四監修、大月書店。われわれ日本国民の第三世界認識はあまりにも貧しく、かつ歪んではいないだろうか。とは刊行のことは、吉田ルイ子、雨宮一夫、両氏の写真を使いながら全五巻やる予定。

幸の中で漂っている。えッ！ ファシ

ズムにつながるからという論理の下で、偉大なことは考えないでおこうという言説がまかり通っている。えッ！ 読み手の大衆化が極限まで行つて、いまや書き手の大衆化時代だと思ふんですね。カパーも文字だらけになつてしまつた。

●科学者は変わるか、科学と社会の思想史。吉岡齊、そしおぶつくす、社会思想社。原爆投下によつて科学者は罪を知つた。だけどアイ版とスマ版がずれちやつてなんか老眼の目で見てるみたいですね、そんなにむずかしい技術を要求してないのにね。

●悲しいけれど必要なこと、中絶の体験。マグダ・デイーンズ、加地永都子訳、晶文社。これも比較的長いタイトル部の部類だ。カパー平では二行にしますよ。「悲しいけれど」で改行して「必要なこと」、デザイン上左右をそろえてみよう、ほら「必要なこと」が大きくなつた、でもこれは悲しいことなのよ、

だけど必要なんでしょ。

●鈴木忠志対談集。リプロポート。別役実、大岡信、磯崎新、高橋康也、月村敏行、土方巽、三浦雅士、寺山修司、勅使河原宏、山口昌男、以上対談者、この十人を図表のようにならべて真中に鈴木忠志の名前をどーんと入れたらデザインも出来上り、アパートの表札か、相撲の番付かといったぐあい。

●満州に残留を命ず。大田正、草思社。著者は元関東軍の将校。撤収作戦のため残留を命ぜられるわけだが、なんと悲惨な話ではないか。以前に同社で「麻山事件」という本が出た。これはおいてけぼりをくつた民間人の悲劇。だから対になるようなデザインにしてくれとの注文。

●ニューメディアの逆説。粉川哲夫、晶文社。先月号の津野海太郎さんの原稿にあるような経過がありまして、結局ナム・ジュン・パイクの作品は使えないことになりました。編集者もいろ

●ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史。ウイリアム・アイヴィンス、白石和也訳、晶文社。私の本のデザイン作業は、まず編集者との対話での第一印象が大切で、その時点で何か思いつかないと後でひとり苦勞することになる。使用されるイラストレーションや図版はたいたいその時点で決めてしまふ。その次は、その本にふさわしい書体の決定、この時は他の本も数冊たまっていて同時に考えることが多い。まず必要な文字を書き出して大きさとか書体を決める、この時点では大まかなレイアウトを頭の中に思い描くわけだが、感違いするとこれまたひと苦勞する、たとえば本書のタイトル、すごく長いのだ、さすがのA5判の本でも入らない。同時に考えるなどとは十年早いとくやまれる。

●大衆論。対談、富岡多恵子、西部邁、草思社。大衆とは、彼らは自らの不幸も自覚できないくらい妙なる種のないとくやまれる。

いろと苦勞したようですが、そのための時間も切迫し、粉川さんからお借りした資料の内からカラージュするようになったことになりました。

●踊ろうぜ。岩田弘、安久利得絵、草思社。昭和二十六、七年ごろが時代背景の青春小説ということで、僕らの兄さんや姉さんの時代だな、あこがれの薄暗き喫茶店、こんな感じで行こう、安久利さんは神田界限にいまだに、その面影を残している、ランプだのラドリオだの写真を撮って歩いて店の人におこられたそうです。

●新潮社トンプの本二冊。新人物往来社二冊「親鸞のすべて」二葉憲香編、「武田信玄に学ぶ」人は城・人は石垣、上野晴朗。戦国武将の行動原理を、いわゆるビジネスのハウトゥとして読む、今はやりのスタイル。講談社学術文庫「木簡学入門」西北社、「善の論理」江頭稔。この本どっかおかし。

# わるいくせ

六月 パイクのビデオ展をみ、クセナキスのだれでも作曲できる(はずの)コンピュータをみ、ローリー・アンダーソンのお金がかかっている様子に感心した。これらの収支決算というか、金銭にかかわる書類をみてみたいものだ、水牛関係のサイフをあずかるわたしはおもう。水牛楽団で楽器の紹介をするとき、なまえやしくみのあとに値段をつけ加えることがよくあった。質流れて何千円というものがあり、借りものでタダというのもあった。ビデオやコンピュータ、シンセサイザーなどは、どうしてもそれにかかる費用でキマルところがあから、いくらなのかわかってみたりきいたりできると、いつそう楽しめるにちがいない。

六月 毎月愛読していた連載があい

次いで完結してしまったので、しばらくマンガを読まなかったが、本屋でコミックコーナーへ立ち寄ると、でてるんだ、あたらしいのが。買った、買った。坂田靖子の「村野」、佐藤史生の「夢みる惑星4」、秋本尚美の「センチメンタルマーメイド」(これは新刊にあらず)、福山庸治の「死神交換イタシマス」、倉多江美の「静蘭に、天才只今勉強中!」、吉田秋生の「吉祥天女3」、それにプチフラワー。

おとなになってもマンガを読み続けている、そのきっかけになったのは、水野英子の「フアイヤー!」だった。週刊セブンティーンに連載されていて、17才はとつくにとおりすぎていたけれど、わたしは毎週それをつとめ帰りに四谷駅の売店で買いとめ、代々木のりかえるまでに読んでしまうのだった。はやく読みたい気持と、読みだせばアツという間に終ってしまうので、もったいないという気持がまぜこぜに

なる。これはちいさなころから慣れ親しんで、しかもあきることのない、あたらしい本をひらくときのよろこび。「フアイヤー」は豪華本もっているから、あれもやっぱり買うことにして、ついでにわたしがえらんだマンガ文庫をつくって開放するのもあるくない。スペースさえあれば。

六月 郵便局の簡易保険の勧誘に、おじさんが何度もくる。18才満期学資保険に葉弥をいれろというのだ。野球熱中少年葉弥は高校野球をやるために高校はいく。六大学野球をやるために大学もいくというタイプに進学希望があるので、そうねえ、もしかしら、お金がかかるかもしれないしねえ……。とおじさんのすすめにのってしまつた。ノルマでもあるのか、おじさんがあまりよろこぶので、ついでに親のほうの養老保険にものってしまった。おじさんは、カバンの中に入っていた粗品のタオルを全部おいて帰っていった。

タオルは8本あった。

七月 近所の図書館で偶然オリアーナ・フアラーチの「愛と死の戦場」ベトナムに生の意味を求めて」をみつけて、とてもうれしかった。フアラーチはすきなんだ。「生まれなかつた子への手紙」も「ひとりの男」ももってるが、図書館で借りたこちらのほう(原題は「無、それだけなのよ」というらしい。いい題!)がおもしろい。一九六七年十一月から六八年十一月にかけて、南ベトナムでの取材を中心とした日記の体裁をとっている。読みだしたらやめられない。自分の日記をつけるのは忘れて、彼女の日記を読みふける。

「そういうわけで、私はこの本を書いた。そしていま、あなたにこれを贈る。たとえ、私がまちがっていたとしてもいやまちがっているとしても、また今後まちがうことがあっても、それは耐えていこう。受取ってくださいるわね。これは、私の命の一年、これを書き

じめてから過ぎ去った、私の一年だ。」おしまい。のほうに、こうある。「あなた」とはフランソワ・ペルーのことだが、それがわたしであつたとしても、かまわないじゃないかと、読んでるわたしはおもうのだ。十年前前にてた本だから、もうそのへんの本屋にはないだろうが、なんとか私有したいものだとおもい、彼女の翻訳されていないものを読むために、ひとつイタリア語でも勉強してみるか、とおもいつく。できないことはわかっていても、この調子では「ひとりであるイタリア語の基礎」とかいう本ぐらいいは買うかもしれない。

七月 バンコクから東京に仕入れに來ているボから電話があつて、雨のふる原宿であう。久しぶりにタイ語をしやべり、タイの友人たちのことをきいたら、タイがなつかしい。その気持に追いうちをかけるようにキアオからはがきがきた。彼女は12才で、トンカ

1オ(稲)というバンドのバンドマスターであり、キムをひいている。お父さんのナオワラットの吹く笛といつしよに詩の朗読なんかもする。ユニセフのコンサートで共演して知りあい、本番中に舞台のそででひそひそしやべつて住所を交換した。手紙は彼女のほうから先にきて、それは英語で書かれていた。I love you very Big. だなんて、彼女の気持がこれ以上通じる英語のいいまわしはこれ以外にない、とわたしは認識するのだった。返事はまよったすえに、タイ語でしたためた。

日本人のおばさんから、なにやらたどたどしいタイ語の手紙をもらうのはどんなものかとおもつたら、その返事はタイ語できて、来週から日本語をならつて、三年たつたらかならず日本に行くからね、と書いてあつた。花のようにわらっている写真も同封されていた。どうしても彼女にはかてないみたい。

## 下手の横吹き笛日記

さてさて、イギリスより待望の日本に帰ってきて、ソーメンにシソの葉などかかせて、ツーツとすり込むうちに食べすぎてしまう。あの種のもので超満腹になると、これはひどい。下を向くと、そのままズズーと出そうになるし、横になると耳からも出てきそうになる。

夜になると目が冴えてきて、昼間は何となくねむく、力が入らない(いつもそうか)。

三日ほどそんな感じで過ごし、この時差ボケとやらもどうにかおさまり、さあ、明日から仕事だ!

六月二十七日 昼間、早稲田のアバコスタジオで羽田健太郎のアレンジ、松竹のダンスの音楽録音、目一杯四時半までかかる。六時よりNETアサヒCMの音楽録り。

六月二十八日 昨日にひき続き、早

稲田アバコスタジオで一時から松竹のダンス音楽の録音。おどりにつける音などもんだから、やたらに速いのがあり口でも言えないような感じで、そういうのは後で聞いてみても何をやっていいのかわからず、扇風機に指をつっこんだみたい。

六月二十九日 キングスタジオ、一時から。池辺晋一郎さんのNHK「こどものうた」のレコーディング。ピッコロとチューバの組み合わせ、定型である。夜六時から早稲田のアバコスタジオ、何だかわからないが、テレビの時代劇の音楽、佐藤勝さんの作曲。

七月一日 先日タイへいっしょに行った、小室等さんのバックをつとめている、ラッキー川崎さんのNHKドラマ音楽を録音。つかこうへいさんの作品。バイオリンとフルートとシンセサイザー。小楽団。ラッキー川崎さんは、何か月も前から古い古にもつきあつてうち合わせなどをし、作曲、演奏もし、

大活躍。私は、ぞうりをつっかけ、家から五分程のNHKへ行って、ほんのすこし笛をふくだけ、小活躍。

七月三日 久しぶりに午前十時から仕事、コロムビアスタジオへ。十二時には家でザルそばなどたぐっている。家が都心に近いというのも、どういものだろう。ねぼけているうち何か事がおこったみたい。昼寝して、夜、このことビクタースタジオへ。竜崎さんという人の作曲の歌謡曲、少ない音で上手なアレンジ。

七月五日 昼一時からキングスタジオ。二時には終了。今日も無事一日すぎた。

七月六日 家のアパートに宮川泰さんという作曲家が住んでいまして、「宇宙戦艦ヤマト」というアニメーションの音楽を作曲、大変にヒットして、駒沢の方に家などを買ったわけです。そんな訳で、今日彼のコンサートを手伝うことになったのです。開口一番、何

西沢幸彦

ます。次号はもう夏休みの真最中、仕事日記ではなく、遊び日記にしようかな。

といつてもこれは僕のコンサートのんだから、冗談と思つて下さいと言われろ。その通り。一応、曲は真面目に演奏するのですけれど、つなぎのしゃべりが大変におかしい、中に真理もあつたりして、けっこう楽しいコンサート。

七月十日 武満徹さんの映画音楽。久しぶりの大編成、ピッコロからバスフルートまで、はりきって持つて行ったのですけれど、演奏したのは、インドネシアのスリンという楽器。厚いサウンドの上で、たよりなげな竹製の不安定な音のインプロヴィゼイション。はじめは楽器のしかけもわからず、吹いてみないと何の音が出るかわからないというような感じであつたが、時がつたにつれ、気分が妙に乗ってきたりして、おもしろくできたな。どんな楽器でも、それなりに奥が深いものである。結局、一時から十時まで、ほとんどの竹を吹いていたのであつた。

七月十一日 朝十時から音響スタジオ

オで、八木正生さんのコマージュナル。アップテンポのジャズ風。久しくこのような感じのものをやっていないのだから、なかなかうまくのれない。

七月十四日 上野の都美術館で、アジアフェスティバルに、休業中の水牛楽団出演。福山夫妻は出演できず、悠治さん、美恵さんと私、三人で演奏する。今までは五人で演奏していたのが三人になったので関係がはっきりしている。悠治さんは、タイのキムという中国の洋琴のような楽器を、トレモロがどうか、左手がどうか言いながら、はじめて人前で演奏する。他に、齋藤晴彦、服部良次両氏の、歌詞つき「ベートーベン、熱情ソナタ」「ショパン、軍隊ポロネーズ」。よくまあ、あんなに口が回るもんだというほどの熱演。打上げにどうぞといわれたが、辞退して帰宅。

そんなわけで今月も別なたいした事もなく、つつがなく終つたようであり



## 友だちと呑めば本になる

あたらしい劇団とか雑誌とか、もつと個人的なことでも、なにかをはじめるようにすると、いつもそれが夏なのだ。むかし夏休みのはじめのころに味わったワクワク感を、いまに再現しようとする無意識の努力のあらわれなのかもしれない。

暑いもへつたくれもない。ふと気がつくと、ことしもまた、はんぶん溶けかけたアスファルトの道を、つぎの約束にむかって、つんのめるようにして歩いていく。こうなると、日記はおろか、手帳さえもつけない。即興的にうごくから、やったこと、これからやろうとしていることを、いちいちノートしている暇がない。七月三十一日の午前十時、「原稿、どうしちやったのよ」とミエさんから電話——担任の先生に絵日記の提出をせまられている気分になった。

雲をのみこんだみたいなの、ニヒルな器量人だった。

七月二十九日。朝九時半、ヨーコにたたき起こされる。橋本夫婦と四人の子どもにつれられ、自家用バスで朝粥をくいにいく。ピール一本。そのまま三条小橋ちかくの画廊に、福本潮子さんの藍染展を見に行く。とてもよかったです。麻のシャツでも木綿のズボンでも、工房にもつてくれば、その場で染めてくれるとのこと。おおいによるこぶ。二年坂の笠置屋さんいき、水宇治白玉とおぼし。梁山泊にもどり、テレビでオリンピック開会式を見る。このナシヨナリズムは尋常でない。ぐったり疲れ、そのままパーベキュー・パーティーになだれこむ。夜、眼がさえて眠れず。『現代思想』林達夫特集をよんだ。林達夫という人があまり好きではなかったことに気づく。

あわてて手帳をひらいてみたけど、そういつた次第で、なにも書きこみがない。よわったよ。今月もすくなからずの人たちと酒を呑み、本の相談をしているはずなのだが、なにせ、そのぜんぶを夏休み型の妄想計画星雲にまきこんでしまったから、ひとつひとつのことからの判別がつかない。七月二十八日午後三時、東京駅のアート・コーヒード平野と待ちあわせた。かろうじて、そのあたりから記憶がはっきりしている。

平野甲賀と「ごだま」で京都に行く。この秋、かれの作品集がリブローポートからでることになっていて、そこに文章を書かなければならない。はじめは対談にしようというので、リブローの及川さんに席をもうけてもらったのだが、なかよく三人が泥酔しただけで仕事にならなかった。こんどしらべてもらってわかった。二十三年間で、じつ

七月三十日。昼まえ、焼物の土を買いにいくという橋本と平野にくつついて、東山七条だか八条のうらまちの陶土屋(?)に行く。備前や中国の土を、かれらは二十キロずつ、ぼくもおつきあいで十キロかつぎ、炎天下、ヒマワリの咲く道を車までこぶ。笠置屋で水宇治白玉とシルコセーキ。

三時にもどると、季刊『梁山泊』創刊号がとどいていた。編集長の礼子夫人はやや興奮ぎみで、ピカピカの雑誌を日高敏隆ほか、近所の執筆者諸氏にとどけるべく、ふたたび暑い町にとびだしていった。平野はロクロのまえに腰をおちつけ、こちらは開店まえの店で雑誌をながめながら菊姫大吟醸を一杯だけいたたく。ハモのツクリをはじめて食った。小料理屋の機関誌というのを、はじめて見た。京都駅で葛屋の1000円弁当を買い、六時すぎの「ひかり」で帰宅。

に七百冊ちかい本を、ぼくはかれといっしょにつくってきた。あらたまつて対談してみたところで、どうなるものでもなかったのだ。

車中でケンケンガクガクをふっかけ、それをもとに平野論を書くつもり。ところがビュッフェでひっかけた水割りのまわりが早すぎて、いい気持で人生論にのめりこみ、このたびも失敗におわる。

タクシーで梁山泊へ。よく冷えた菊姫の山麩酒をのむうちに、京大のノグチ先生くる。デイヴィッド・グッドマンを京都によぶ可能性なきにしもあらずということ、その相談がこんどの京都市の主目的なのだ。どうやら話があまくすすみそうなのに安心して、梁山泊一党をくわえ、あたらしくできたという焼肉屋で三時まで呑む。先生いわく、東京をつぶせ。大学を廃止せよ。そうすれば日本もちつとはましくなるかもしれない。腹のそこに真黒な

七月三十一日。十時、ミエさんの電話で眼をさまし、シャワーをかぶってこの原稿を書きはじめる。十二時半、三宅榛名さんと荻窪駅ビルの「藪」で会い、鴨ナンパンを食べながら、彼女のエッセイ集の書名を考える。彼女の案は大胆にすぎ、ぼくのやつはセンチに移り、なんとかメドがついたかなというあたりで、あとは明日ということにする。

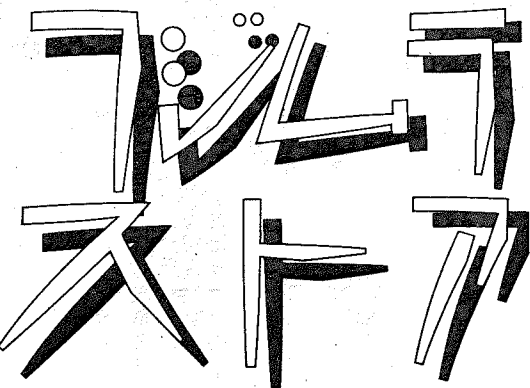
本屋によってミヒヤエル・エンデの『オリーブの森で語りあう』を買い、クリーニング屋に洗濯物を投げこんで部屋にもどると、もう三時ではないか。五時、時間ぎれ。おわりの二十行は荻窪から高田馬場にむかう地下鉄のなかで書いた。いや、書いている。高田馬場のルノワールでは、ミエさんと田川さんと陶文堂さんが四時から待っている。……待っていてくれるはず。

津野海太郎



編集後記

十三歳の秋に、ワラジをはいて、年齢をごまかして、小人の切符を買って、大阪へ家を出をし、その三年前にただ一度だけ父親に連れて行って貰った大阪駅近くの盛り場の喫茶店を、宵闇が漂う中で、発見して以来、ナビゲーター（水先案内人）のくせがついてしまったのか、未知の地を探検することと、地図に異常なほど関心が強い。それでも、ナビゲーターにはいつも失敗がつきもの。今回のアメリカの旅でも、帰国前日に、雷雨轟然のシカゴ郊外で、田舎町の四つ角のガソリンスタンドに、行き暮れてしまった。そういう人に会うと妙に親切気を出すアメリカ人の性格から、あやうくダラス行最終便に間に合ったが、このスタンドから呼んだタクシーが四十分もたって到着した時、ドライバーにスタンドのニイちゃんか、「もう時間がないから急いだから。この人英語がワカンないから、よろしく」といわれたのはガツクリ。町を歩き、店に入るぐらいならもはやなんの苦労もなく英語圏ですごせても、いざこんな風な話がコンガラガルと、まさに赤子も同然。ナビゲーターも英語もつくづくムツカシイ(田)



水牛楽団十矢川澄子十如月小春  
定価二三〇〇円(送料サードビズ)  
夜這いの曲 しずくの曲 祖母  
のうた 最後のノート だるま  
さん千字文 ワルシヤワ労働歌  
花巻農学校精神歌 ポクハソ  
ンケイスル 都市 ★編集部あ  
て郵便振替で申し込んで下さい

\*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会

口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)

住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

\*本誌は次の書店にあります。

模楽舎(新宿) ☎三五二一三五七

ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七

信愛書店(西荻窪) ☎三三三三〇四九六一

ワンラブブックス(下北沢) ☎四一〇一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)

カンカンポア(西武渋谷店B館B1)

ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三二一三三八〇

水牛通信 第六巻第八号

一九八四年八月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 ㈱トライプリントシヨップ